

桜井徳太郎氏所蔵『鼠絵』攷

三 浦 億 人

お伽草子の異類物語に登場する異類は、動植物から無機物まで多種多様に亘っているが、中でも、鼠を主人公とする物語草子の数は群を抜いている。『お伽草子事典』に登録されているものだけで『鼠の草子』『鼠草子』『鼠さうし』『弥兵衛鼠』と四種の別個の物語が存在し、これらの内、ケンブリッジ大学図書館にのみ蔵される孤本『鼠さうし』については、稿者も以前論じたことがある。しかし、三種の中で、もっとも人口に膾炙しており、伝本の数が多いのは『鼠の草子』であろう。人間の女性との婚姻を切望する「鼠の権頭」を主人公とし、清水寺参詣の折に出会った「姫君」と恋に堕ち、祝言にまで至るものの、その寸前で鼠である正体が露見し婚姻は破綻、「鼠の権頭」は高野山に発心出家するという異類婚姻・発心出家譚である。これまでに知られている代表的な伝本だけでも、サントリ美術館本、東京国立博物館本、スペンサー・コレクション本、天理大学図書館本などを挙げることで、ここに最近では、丹波篠山青山記念館本（近世前期の書写）などの新しい伝本が加わった。そして、もっとも制作期が古いとみられる天理大学図書館以降の伝本ではその内容には、これまで大きな相違はみられなかった。し

かし、絵巻という媒体でこの物語を享受した室町や江戸前期の読者にとつて、鼠たちによる「婚礼行列」や「祝言」の場面は、一際、興味をそそられたシーンであったと想像される。事実、最近では、龍澤彩氏によつて、物語の大筋に差異はないものの、「婚礼行列」の場面だけに特異な内容を有する甲子園学院本『鼠の草子』の存在が報告された。

ここに紹介する桜井徳太郎氏所蔵の『鼠の草子』は、断簡のため、物語の首尾については判然としないが、上述の『鼠の草子』の「祝言」の場面から刺激を受け、新たに着想・制作されたものと考えられる。『鼠の草子』の中でも、「婚礼行列」の場面と並んで、この「祝言」の場面は、絵巻全体の中でも、特に鼠たちの生命力や逞しい生活力が横溢しており、一読した者をその世界に引きづり込む力に満ちている。そのため、このような『鼠の草子』の有名な一場面を借りながら、内容を全く異にする、伝本が創造されたのであろう。桜井本『鼠の草子』は、この「祝言」の場面（これに付随する宴の準備や風呂焚きなどに奔走する裏方の様子）に注目し、これを再創造した断簡であり、総勢二十七名の名前を与えられた鼠たちの会

話（画中詞）のみから構成され、詞書の類は一切存在しない。そこに登場する鼠たちの名前を見ても、主人公の「こんのかみとの」をはじめ、「とこなつ」「こんあみ」「ちよこ」「まつ」の五名は、先行する『鼠の草子』にみえる名であるが、その他の二十二名については他の伝本に全く見えない名前である。また、彼ら彼女らの発する言葉（画中詞）は、いづれも他の『鼠の草子』伝本にはみえない独自のものである。

これらのことから、『鼠の草子』の一面を描いたものではあるが、その内容の独自性に鑑みて、ここにあらためて紹介することとした。

詳細な考察については、別稿に譲ることにするが、二、三点、重要と思われる注目点を指摘しておきたい。一つは、原本を調査させていただいた上での所見では、紙の質、文字などの様子から江戸初期は降らない伝本と考えられ（場合によっては室町末頃の筆写の可能性も否定できないと思う）、室町にまで遡る伝本の少ない『鼠の草子』の中では、首尾は欠くものの、物語の伝来を考える上で重要であるという点である。

二点目は、箱書に「鼠絵 土佐筆」と直接墨書されている点である。「土佐筆」の真偽は措くとして、この作品が「鼠絵」として享受されていたことは注目しておいてよいだろう。

鼠を主人公とする物語草子の多くは、多くの場合「鼠草子（鼠草子）」などと墨書・分類されているが、桜井本の場合「鼠絵」と墨書、認定されており、鼠の権頭を主人公とする「物語」全体を読ん

で楽しむというよりは、一場面の「絵」のみを意識的に取り出して楽しんでいたことを示す言葉とも考えられる。私はこれまで「断簡」という語や「首尾を欠く」という表現を度々用いてきたが、桜井本は、既に知られている『鼠の草子』を前提にして、この祝言支度の場面のみを楽しむためのもので、ここに紹介するもので、「完結」しているともみることができるかもしれない。

三点目は、やはり箱書に「言葉書 後土御門院句当内侍筆」と墨書されていることである。この「後土御門院句当内侍筆」の語は、室町後期から江戸初期に制作されたとみられる物語草子やその断簡にしばしばみられるものであり、これまで知り得た限りのものをすべてリストアップしてみると、特に異類物に多くみられる一文なのである。すでによく知られているものだけでも、横山重氏旧蔵の『きりぎりす物語』、『玉虫の草子』、徳田和夫氏蔵『草合戦巻』、某氏蔵「秋虫のなかなほり」など枚挙に暇がない。なぜ「後土御門院句当内侍」がお伽草子の、とりわけ異類物の作者として仮託されたのか、そのように仮託し墨書されることで、作品にどのような意味が付与されたのかという問題は、この時代の物語草子（異類物）制作や享受の上で重要な問題であると思われるが、これらについては、他日を期すことにしたい。

（みうら・おくと 大学院博士後期課程在学）

【桜井本・『鼠の草子』翻刻】

① (とこなつ)

こんには御はんにあたり候めてたき
事なりひとしほしんらう
申候ひきてものをおほく
とり申候

② (ひたきのちんひやうへ)

なまきはかり
たき候けるけふり
候てんかりくゝに候

③ (はつね)

こんにち御はんにあたり候
あのこんあみの見るとき
はかりにてことはのすへは
あはすちやもいやにて候

④ (こんあみ)

いかにはつねうちもとかのをも
むちやうもごくもむへつきも
これにあるなり水おけをおろし

ちやとのましましたちなからものまし
ませすこし申たき事候

⑤ (しもおとこ とう八)

あらかたいやこしいたや
たいところしゆに御めにか
たく候よきさかなともたはね
てまいり候たいかおほきく候
まゝ、やうくもち候

⑥ (うほあらいのしんひやうへ)

ふしやうなる水のかげやうやしもおとこ
なれともあまりいやしき身にても
なしよるのわさはたれにもおとる
ましこゝろにいでて水をかけよ
いやならはよきにせよ

⑦ (せんしゆ)

しもおとこの身に候て
ようなき事ないひそ
われこちへよれ

⑧ (むめかや)

いかに大かくとのあまり

御けすともなしかり

給ひそはんには又よはいに

御こしあるへしいつともおこし候へしようしすきたるものはくち
をきそふものにて候

⑨ (まつの)

くちていふことにはたれにもおとるましけれともわれも

人もた、かんにんせよおとこはですときかれけるせおもひ

しらせ候へしおかしさよ

うしろすかたはすはたなりな

⑩ (ゆとのふきやうの大かく)

まつのむめかやつるくすちよこ

水はやくくめをそくにとて

とのさま御はらたちにてある候

さうたんはむように候へともむめかへ

とかのやうにおほせ候そやれいのまつの、そらわらい

⑪ (つるくす)

夕へとの、御たいところになたれは

つき、よくかしく見たれは大かく

とのににたるおとこはたか

にできたほとにそのま、

おひこしてつきのまへにけたれはうめかやのもとへゆかれしかあ

まりおかしさによすからねられてよをあかしてけさまて

わらふたおれはそこらおかたひ物たよ

⑫ (ちよこ)

御ゆとのかちかきそよ

こゝろありて物いはしませ

りんきのふかきとのさまにて御座候そよ

⑬ (ひめしや御ゆとの、やく)

あらさむやけさからこ、へて

さむけたちかするそ

わたくしはいまたおとこはいた、かすあらおつかなや

⑭ (こんのかみとの)

いかに大かくのすけゆかあさ

くていられぬそ水はやくもたせよおふなどもを

しはれ

いかにひめしやかいはは候や

たれにもわかせたりけれ

かはくふそよく

⑮ (あや、ち)

こひしゆかしとやる文をこかのわたりておとろいた

⑯ (まこしも)

あらこゝろなのつかいやきみのうき

なはかわにこそあれ

⑰ (まつしゆ)

やいこねすみともこめ

きへてふんことのに

しかられ申な

⑱ (たなもとさかしのふんこ)

すきやのぶぎやうなり。

いかにおふなともなふとてこ

ともにこめをくわせるそ

かならすまんやうかちか

なすものを

⑲ (まつはかき)

ふくかせもこゝろあれし雨つさを

きみかたもとにふきこめ

うたはこたへとひもしさよふんことの

⑳ (かるかや)

いやまことわすれたりや

あすはいわまのおれんか

㉑ (なてしこ)

あれなかれいわまのれんか

おもふ人かこはう候

㉒ (おみなへし)

おもひきるてをしらてた、

こゝろつくしはかりのうたよ

㉓ (ききやう)

このほとはこゝろか身にそわて

そらかみらるゝつくきねは

身とはやつさてこひに

やつすものかなふねにはのらねともきみにこかるゝわか身かな

㉔ (おかく)

へいせいのかちほともおしくないぞ。いけはらしめせ

こゝろほとこをほうむそやつといつてひといい

はりゑつといつてひといいけはらしめせ

②5 (はなこ)

あふなふこれなふさくるやうなぞ
おのこ、たけたこれとり
あけよ

②6 (ち、はく)

むまれこをとりあけてさても
くみめのうつくしくさよ

かほのやうたいはて、かたつまはつれば
御ふくろなりかまへてこう申身つから

あやかりしめせ五十までねうのこゑをきかすしてい
のちはる二十ねんくわほうは候けれながら□□きこしめせ

②7 (ちよ)

ねんねんころろくうはかこないて
にやうにとらるゝな

〔箱書(蓋裏)〕

単絵 土佐筆

言葉書 御土御門院匂当内侍筆

〔釈文〕

① (常夏)

今日は御飯に当たり候ふ。めでたき事なり。一入、心勞申し候ふ。
引出物を多く取り申し候ふ。

② (火炊きの珍兵衛)

生木ばかり炊き候ける。けぶり候てん。かりかりに候ふ。

③ (初音)

今日、御飯に当たり候ふ。あの権阿弥の見る時はかりにて、言葉
の末は合はず。茶もいやにて候ふ。

④ (権阿弥)

いかに初音。宇治も樽尾もむちやうもごくもむへつきもこれにあ
るなり。水桶を下ろし、茶殿まします。立ちながらも飲まします。
少し申たき事候ふ。

⑤ (下男 藤八)

あら肩痛や、腰痛や。台所衆に御目にかけて候ふ。よき魚共東
ねて参り候ふ。鯛が大きく候ふまま、やうやう持ち候ふ。

⑥ (魚洗いの甚兵衛)

不精なる水の掛けやうや。下男なれどもあまり卑しき身にてもな

し。夜のわざは誰にも劣るまじ。心に入れて水をかけよ。いやならば、よきにせよ。

⑦ (千寿)

下男の身に候ひて、用なき事、な言ひそ。われ、こちへ寄れ。

⑧ (梅ヶ谷)

いかに大覚殿。あまり御下衆共、な叱り給ひそ。晩には又、夜這いに御越あるべし。いつともお越候べし。容姿過ぎたる者は愚痴を競ふものにて候ふ。

⑨ (松野)

愚痴て言ふことには誰にも劣るまじけれども、われも人もただ堪忍せよ。男はてすときかれけるせ思ひ知らせ候ふべし。おかしさよ。後ろ姿は素肌なりな。

⑩ (湯殿奉行の大覚)

松野、梅ヶ谷、鶴くす、千代子、水早く汲め。「遅くに」とて殿様御腹立ちにてある候ふ。雑談は無用に候へ共、梅ヶ枝とかのやうに仰せ候ぞや。例の松野の空笑い。

⑪ (鶴くす)

夕べ、殿の御台所に寝たれば、月清くかしに見たれば、大覚殿に

似たる男、裸にて来た程に、そのまま追ひ越して次の間へ逃げたれば、梅ヶ谷のもとへ行かれしが、あまりおかしさに、よすがら寝られて、夜を明かして、今朝まで笑ふたおれば、そこら、おかたひ物だよ。

⑫ (千代子)

御湯殿が近きぞよ。心ありて物言はしませ。愠気の深き殿様に御座候ぞよ。

⑬ (姫者御湯殿の役)

あら寒や。今朝からごごへて、寒気立ちがするぞ。私は未だ男はただかす。あら、おっかなや。

⑭ (権頭殿)

いかに大覚助。湯が浅くて入られぬぞ。水早く持たせよ。姫共を縛れ。いかに姫者。權をば候ふや。誰にも沸かせたりけれかはくふそよ。

⑮ (あややち)

恋しゆかしと遣る文を久我のわたりておとろいた。

⑯ (まこしも)

あら、心無の使いや。君の浮き名は河にこそあれ。

⑰ (松寿)

やい、子鼠ども。米消へて豊後殿に叱られ申すな。

⑱ (棚元探しの豊後)

数寄屋の奉行なり。いかに嬢ども。なふとて子供に米を食わせるぞ。必ずまんやうがちかなすものを。

⑲ (松葉搔き)

吹く風も心荒れし雨章を君が袂に吹き込め。歌は答へど、ひもじさよ、豊後殿。

⑳ (かるかや)

いや、まこと忘れたりや。明日は岩間のおれんか。

㉑ (なでしこ)

あれ流れ岩間のれんか。おもふ人がこはう候ふ。

㉒ (女郎花)

思ひ切るてを知らで、ただ心尽くしはかりの歌よ。

㉓ (桔梗)

この程は心が身に添わで、空かみらるるつく杵は、身とはやつさで恋にやつすものかな。舟には乗らねども、君に焦がるる我が身

かな。

㉔ (おかく)

平生の口ほどもおしくないぞ。息張らしめせ。心ほど子をば生むぞ。「やつ」と言つて一息張り、「ゑつ」と言つて一息張り、息張らしめせ。

㉕ (花子)

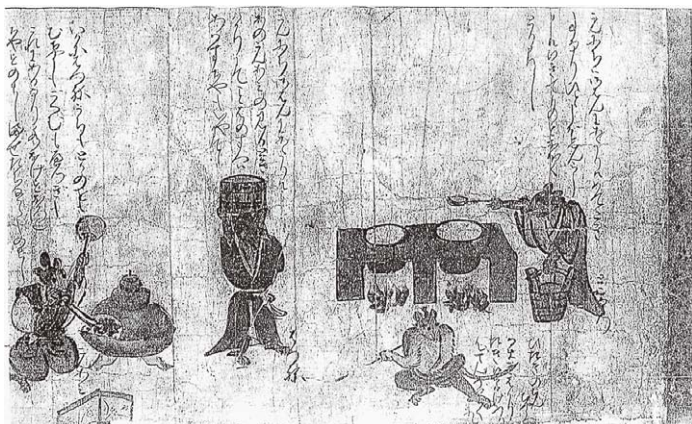
あふなふ、これなふ、割くるやうなぞ。男子たけたこれ取り上げよ。

㉖ (ちちはく)

生まれ子を取り上げて、さてもさても見目の美しさよ。顔の様体はは父方、つまはつれは御袋なり。構へてこう申す身つから、あやかりしめせ。五十までねうの声を聞かずして、命張る二十年果報は候ひけれ。なから□□聞こしめせ。

㉗ (千代)

ねんねんころころ、乳母が来ないでにやうに取らるるな。



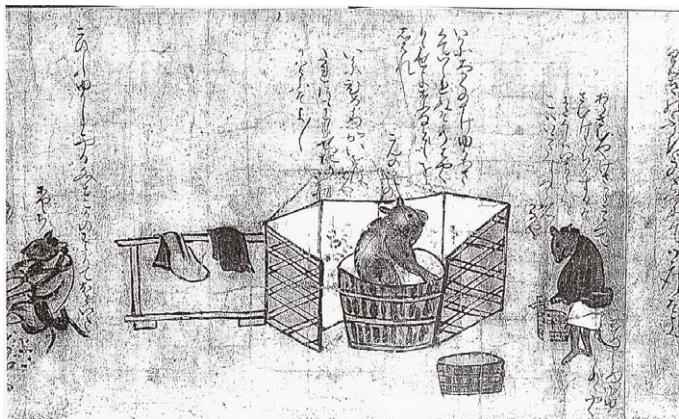
1 図



2 図



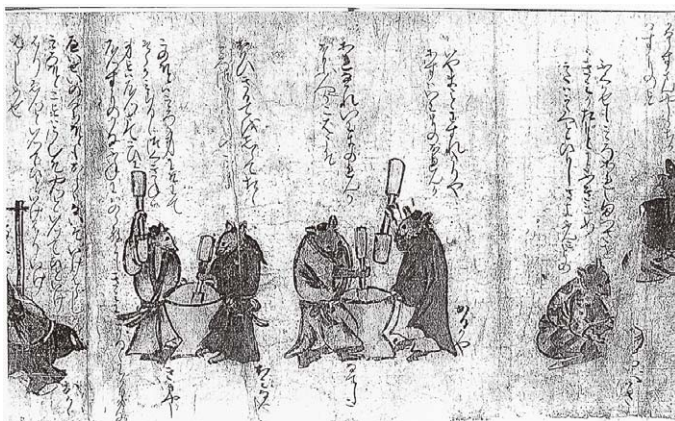
3 図



4 図



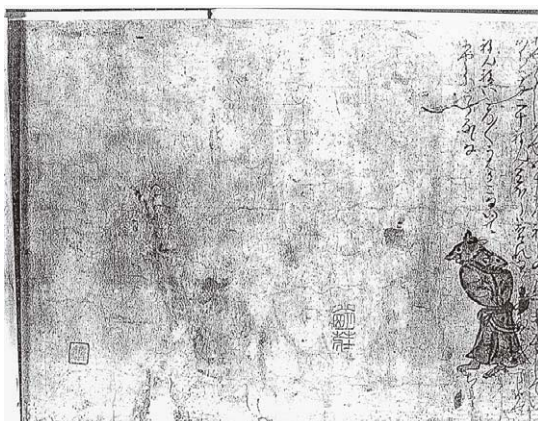
5 図



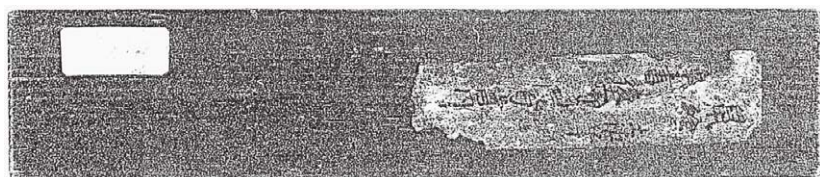
6 図



7 図



8 図



箱書 (裏蓋)